

「本明川ダム建設事業の検証に係る検討報告書（素案）」に対する関係住民からの意見を聴く場

日 時：平成25年6月15日（土） 14時00分～15時05分

場 所：高城会館 大研修室（1階）

#### ○住民（1番）

会場の皆様こんにちは。わたくし、諫早市中尾町の方から参りました、●●と申します。しばらくお耳を拝借願いたいと思います。これから述べる内容に対して、適切な規模、時期、内容の住民説明会を、ぜひ国土交通省を主体として、長崎県、諫早市、水道企業団ですね、こちらの方からぜひ解説をしていただきたいと思いますのでよろしくお願いいたします。

具体的な内容の細部に先立ち、先の第2回の本明川ダム建設事業関係地方公共団体からなる検討の場の資料にある私が応募した意見の回答については、一部を除き別途意見させていただきますので、これもあわせてよろしくお願いいたします。

まず、先の第2回の本明川ダム建設事業関係地方公共団体からなる検討の場に応募させていただいた1つの意見について申し上げたいと思います。本明川の7k000付近から3k400付近までの本明川本川河川敷下に必要相当断面の放水路（暗渠）を形成する案を出しております。標高は他の放水路案と同等ですし、ここは傾斜面で河川敷上に配分してはどうかといった意見を出ささせていただいておりました。これに対して国土交通省さんからの回答ありまして、一部除きますが、「仮に河川敷の下に放水路を整地する場合は、最深の河床高、洪水時の局所洗掘を考慮し、河川管理施設や橋梁等の構造物に影響を及ぼさないような深さに放水路を設置する必要があります。」とありました。そのような目的であればですね、なにも必要な深さ、深いところに構造物を持ってくる必要はなく、それに対処した構造物を浅い所に、まあできたらですね、河川敷の表層の直下ですね、そちらの方に設けることは十分技術的に可能だと思います。洗掘等に対して提案が出されておる訳ですけども、数多ある河川、そして暗渠、そして放水路、いずれも洗掘に対しての対策を十分にとって、実際、現実運営されておる訳ですから、なにも、こう代替案に対して、こうだからということで、除かれる根拠にはならないですから、というふうに考えています。

また、「ご意見の放水路は、延長が約3.6km程度の放水路となりますが、こちらにあったように、吐口を傾斜させて河川敷上に開口しようとした場合、吐口に近づく程トンネルの深さが浅くなっていくことから、場合によっては、付近の川岸及び河川管理施設等の構造物に影響を及ぼす可能性があります。」というようなご指摘がありましたけれども、特段そういったものに対する対応を考えても技術的に可能だと。

ちょっと話が長くなりましたが、今までのですね、第1回検討の場から経緯を考えてみますとですね、いくつかの対応が上げられておりましたけれども、非常にスパンの短い間に次から次へと出ております。これに関してですね、非常に住民として戸惑っております。時間が非常にありません。全体工程の公表というものも既にできると思いますので、これを早急にやっていただきたいと思っております。そして水道事業中止の経緯、そして問題点、責任説明、これは、各公共団体等と共にですね、国土交通省にも十分な責任があります。それについて、十分な説明を行っていただきたいと思っております。これはダム事業検証に係る検討に関する再評価実施要領細目に挙げられております、国土交通省の責任というものがああります。そこをちゃんと適切にやっていただかないことにはですね、新た

な、その事業の説明というものはできないと思います。

諫早市の新たな水需要に関する説明というものも出されておられません。これに関する検討というのも十分になされないといけないと思いますが、今回のこのトータル350ページあまりの資料の中には一切説明がありません。これ、非常に重要なことですので、是非、検討して早急に公表をプレスリリースしていただきたいと思ひますし、再度住民説明をやっていただきたいと思ひます。是非よろしくお願ひいたします。以上です。

## ○住民（2番）

皆さんこんにちは。私、諫早市民の●●と申します。よろしくお願ひ致します。

昭和32年7月25日の諫早大水害を語り継ぐ活動に係わっているものとして、本明川の洪水の防止は最大の関心事なのです。

今回の検証・検討の目的は、ダム規模を縮小し、洪水調整及び流水の正常な機能維持にあると明記しております。この目的に関して、安全度、実現性、持続性、柔軟性、地域社会及び環境への影響、費用対効果などに対する総合評価の結果、本明川にダム建設が最も有利な案として取りまとめられております。

現在、河道の掘削などの河道改修を進め、水害の防災・減災に対応していますが、将来的には本明川ダム建設で一層の洪水安全度を確保し、流水維持、渇水に対応しようとしていると思われる。急峻な本明川の上・中・下流域の地形的な特色や、地域沿いの都市域の集中・住宅密集などを考慮すると、ダム案も首肯できる。利水計画検証等の問題があるものの、本明川ダム案に理解を示したいと思ひます。

気候変動により1時間に100mm以上の豪雨が約2倍に増えていると言われております。本明川でも大洪水発生頻度が増すと予想されております。大洪水はいつ発生してもおかしくない状況ですので、洪水に早期の対応が必要なのではないかと思ひます。

本明川ダム建設事業の検証に係る意見聴取というダム建設に特定したものになってはいますが、別の視点から意見を申し上げます。

いかに近代的な技術が優れていても、ダムなどによる治水施設のみでは大水害は防げません。ダムは万能ではありません。ダム建設という技術力によって川を完全にコントロールすることはできません。しかし、堅牢なダムを建設されると住民は安心するという傾向にある。河川整備・治水施設というハードへの過信は禁物です。万が一、ダムが洪水に耐えられなかった場合、耐えられなかった場合は大悲劇を迎える、招くこととなります。諫早大水害相当規模の洪水には有効ではあるが、それ以上の大水害には耐えられないということならば、地域住民と行政が一体となって、ハードの限界を認識し、新しいソフト対策を常に工夫する努力が必要かと思ひます。ソフト対策は知識ではなく、大水害を起こした本明川の地形地質などの特性を現場で学び、避難などを考慮した地域づくり、情報提供・共有など実践的な対策が講じられる事が何よりも重要なことです。

今回の検討報告書では、最新の調査・検討結果や設計成果を反映していると思ひますが、ダムの耐震構造、水流、流量など、構造・流体力学などの工学的予想を超えた事態が生じないとも言い難いのです。また、人工的なダム建設による様々な副作用にも適切に対応する姿勢を構築して頂きたいと思ひます。ダム建設による水量の変化、川を媒介とする物質・生体環境などの環境問題、ダム湖の堆砂対策にも細心の注意を払う必要があります。本明川水害対策の基本は、上・中・下河口

周辺に至るまでの流域を一つとして河川整備計画を推進することですが、本明川の管理は国と県により分断されています。縦割り行政による弊害がないようお願いしたいと思います。

最後になりますが、暴れ川本明川の治水の根本は本明川とその流域の自然と住民との共生であり、母なる川、本明川に親しむ文化を共に育むことが大切ではないかと申し上げて意見発表を終わります。ありがとうございました。

### ○住民（3番）

私は昭和32年の大水害の時、城見町の消防署の裏の方に住んでおりました。当時、経験を致しました。友達も亡くなりました。その直後、諫早は都市計画が立てられておりませんでしたから、新たに、この大水害32年に対して、将来、絶対に再度氾濫が起きないようにということで、都市計画法、区画整理法が制定されまして、土地、住民はその区画整理に伴って、関係のない方の2割の土地を提供して、本日に至っているわけですが、もう55年になりますけども当時の思い出がよぎります。私の家も道路で城見町の上の道路で切断されまして、二分され、2割提供致して、はや昔のことと思っております。本明川ダム地点の調査を聞きましたら、非常に多良岳の火山灰を含んだ凝灰角礫岩で火山の噴出や洪水によって堆積された集塊岩で固まっております。灰と岩の固まった地形と承っております。これはダムを造るうえにおいて、最も悪条件の地質でございます。だから、堤体の幅はもとは300mか400mか今、今回は100mになっておりますけれど、そんなダムは地形の悪いところにしいて50mのダムを造るということに計画がなっております。なおかつ、その地点には活断層が通っております。その対策がどうなっておるか私は全然聞いておりません。ダムは水を溜めるものでございます。目的は水を貯める。全国では水が貯まらない漏水のダムがあちこちあります。漏水を防ぐにはカーテングラウトが必要。カーテングラウト、ダムのグラウトのボーリングを深さ50m、60m注入するわけですが、漏水の目的のカーテングラウトの地点では、セメントをグラウトはセメントを注入致しますけども、水圧のかかった湛水の水に対してセメントミルクは効果ありません。薬液注入になると思います。

諫早市の上水道は皆さんご存知のように、地下水50mのところから汲み上げた非常に旨いミネラルウォーターでございますけれど、冬は温かく、夏は冷たく、このような立派な水道水がうまれた現状でございます。日本ではめずらしい現状の恵まれた諫早の上水でございます。

ダム地点のカーテングラウト周辺、貯水池の周りの、やはり灰が固まったような地形だから、水が漏れますから、ここを全部グラウトする、薬液注入をやるわけですが、この薬液注入が諫早の水道が今まで地下水70%から80%に頼っておりましたが、影響があることは確実であります。地下水、水道に対する薬液注入の影響は計り知れません。

それから、次に公園堰の地点の毎秒0.25トン流す、維持用水として0.25トンということは、幅が1mだったら25センチ、公園堰のところは仮に10mの幅を流れているとすれば、2センチ5ミリの水しか流れないわけです。それで、ちょろちょろ水を流すわけですが、全国で健康の長寿の県は今まで沖縄県でございましたけれど、今は雪解け水がとうとうと流れる長野県が男女とも日本一の長寿の県でございます。水がとうとうと流れる諫早の本明川を見捨てて、工法が安いからただ金が安いから環境を破壊するため池の樹木を伐採し、薬液注入を注ぎ、天然のため水、PM2.5とかなんとか、溜水を市民に飲ませるような悪環境を必ずや安いからダムを造るというんじゃないで、後輩に私どもの健康で幸せのために、健康な諫早市をつくって頂きたいと思っております。以上です。

#### ○住民（4番）

私50年ほど諫早に居住致しております●●と申します。

本明川ダムの目的ですが、私は、今までそのいわゆる良く存じ上げておりました洪水調節、第二点が流水の正常な流量の維持を機能すると、また三番目にですね、あの水道用水の確保、ということですね私は理解をいたしておりました。

ただ、あの最近になりまして水道水の件につきましては中止というのを、新聞紙等でお伺いいたしまして、まあ、それはそれとして別問題として、私の考え方からは取り扱っております。まあ、要するに本明川はこれまでにですね、昭和32年、あるいは昭和57年、平成11年と三回にわたりまして洪水が発生し、市街地が水害に見舞われてきた訳でございます。

その後、本明川は川づくりの計画の見直し、あるいは河川整備計画の策定、あるいは河川整備基本方針の策定を行われてきています。この様な策定に基づきまして、一方では河川整備により、川の堆積土砂の除去、あるいは川幅を広くする拡幅工事、また、多自然型かわづくり等、水辺に親しめる環境整備を進められてまいりました。

しかし、暴れ川と言われる本明川は、日常水量が非常に少のうございます。日照りが続きますと、干ばつになることは、よくよく皆様方もご存じかと思いますが、渇水が要するに心配されます。

市民の生活、あるいは農業用水の利用、自然環境の生態系への影響はもちろんのことです。河川流量の安定が、是非必要だと私は認識をいたしております。

本明川の現在、日常流量につきましては、実際はどの程度が本当に維持されているものなのか、常に疑問に思っているところでございます。

今後、ダムの計画につきましては、色々先ほど国土交通省の課長さんからご説明がございましたですが、もうあの何せ今度のダム計画につきましてはですね、実際にどの様な方向で進む様になっているのか、どの様な見通しになっているのか、そこらへんを私は常にこう懸念いたしているところでございます。

今後、一刻も早く河川の本明川の河川の維持流量ということにつきまして、非常に私は期待をしておりますので、そこらへんを一つよろしくお願いしたいと思っております。以上でございます。

#### ○住民（5番）

諫早市の小長井町に住んでおります●●と申します。今日はあの今日先程の説明とその資料を見させていただきましてことから、本明川についてちょっと突然ですけども述べさせていただきたいと思っております。

私も昭和32年の時はですね、鷹早川というところのそばに住んでおりましたけれども、そういう大きな水害がありまして、うちはたまたま2, 3m高いところにおったもんですから、まあ被害は遭わなかったんですけども、逃げ遅れた方々がですね、おられまして、子供の頃によく見ておりました。ちょうど雷がひどくて全部あの様子が伺えたわけですけども、逃げ遅れた方をですね、うちの親も含めて近所の人5, 6人で体にロープを巻きつけながら、助けに行かれたんです。それで、おじいちゃんとおばあちゃんを背負ってうちの家に避難させたことがございまして、そういうことが非常によく私の眼に鮮明に残っております。

それで、また私も仕事柄、いろんなそういう河川とか、そういう風な関係の仕事を担当されてきた関係上、非常にその本明川ダムの計画については関心を持っておりました。もともと本明川ダムの

計画についてはもともと関心を持っておりました。一刻も早く実現すべきだなあと思いつつ、私は注視してきておりました。ところが先程の新聞にも載っておりましたけれども利水が消えた、ということですし、治水が残ったわけです。本明川は昭和32年にもありましたように、先ほどどなたさんでしたかね、昭和37年もあった、そして各地です、佐世保水害もありましたし、長崎大水害もありましたし、私も長崎にもおったわけですがけれども、渇水にも遭いましたし、昭和57年災も経験しました。そのときにですね、長崎の方々は、まあ長崎は今まで水害が来たことがないからといって、安心感を持っておられたんです。それを私も聞いておりました。佐世保市になるんですけど昭和42年の大水害のときも、そういうようなことで長崎市の方は思っておられたわけですが、昭和57年のときのような大きな災害が出たわけですので。やはり今の計画をみてみますと、1070トンでしたか、ちょっと数値は忘れましたが、まあそういうような流量が流れてくると、そのなかで裏山橋地点では、ちょっと数値は忘れましたが800トンくらいですかね、これだけしか河道の能力がないということで、当然やはり溢れる危険があるわけですので。

私も本明川なんかをよく見てみますと、現在昭和32年で再整備された本明川ですけども、非常にですね現地の地形をよく考慮されて、市街地にもですねマッチしたような河道計画になっているのではないかなと思っております。特に堤防をそんなにですね上げることなく、市街地の部分についてはパラペット方式で胸壁をつくっておられまして、非常にその市街地と一体になったような川づくりになっているのではないかと思います。河道の高さにつきましても川幅に対して護岸の高さなんかですね、うまくバランスがとれておられまして、非常に親水的にもですね水に親しめるような雰囲気の中で、現在も飛び石なんかをつくって、また駐車場なんかにも利用したりもしてですね、昭和32年の7月25日の慰霊祭をかねた川祭りなんかにつきましてもですね、灯籠なんかも灯して、非常にみんな市民に親しまれている川じゃないかと思っています。

今の検討の結果をみてみましても、河道掘削とか嵩上げとか、まあいろいろ引堤とか、検討されておりますが、私からみますと、現在の河道はそのままにしてもらった方がいいと私は思っているわけです。そういうなかで、やはり治水対策を図ろうとすれば、やはりいま国の方が検討されました、本明川ダムが最適ではないかと私はいま感じているところでございます。

いろんな諸問題が起きると、あることは他のダムでも語られてきておりますので、そのへんにつきましてもですね、いろんな対策を講じていただくことによって解決できるのではないかと期待しております。特にあのダムを造る場合はですね、その他の環境にも影響があるといっておられましたように、やはりその影響がないような状態では続かないわけですので、それをまた配慮したような計画にしていくと、それとやはりあの受益者は下流側ですね、ダムを造った場合は、上流の方々はぜんぶ犠牲者みたいな、犠牲者という言葉が少し悪いかもしれませんが、その水源の方にはどっちかというところまあ下流のために犠牲になるような形になるわけですので、ダムをつくる場合はそのへんのですねいろんな補償を、生活再建の問題とか、いろんな水源地対策とか、まあそのへんでですね十分考慮していただきたいと私はお願いをしたいと思っています。

やはりそのせっかくつくるダムにつきましても、やはり新しい湖面がそこに出現するわけですので、市民に親しまれるようなものを是非一刻も早くですね、実現するようにがんばっていただきたいと思っております。以上でございます。